

サテウルヌスの孫



子(十)鳥

サテウルヌスの孫

装
画

島
さ
ち
子

サテウルヌスの孫

夜、呼んでも医師がこない、彼女は汚れた雨のようにおちる街燈の光を着込んで薬を買いに街へ走り出す、彼女の駆けのぼる階段は彼の肋骨でできた階段で、たわみ、いたみ、彼女のもののようにつばさえ呑み下すことができない。

もう少しして、朝がしらみかけたら薬局のドアをたたかなければ……、いざというときに彼を蘇生させるカンフルを、ありったけ買い込むために店の前にたたずみ、じっと待つ。この暗さのなか、その地下鉄の入り口から入って、下へ下へ羽音をこだまさせながら降りていくハト？ がいる。昨日の通行人の残していった臭気が、戸閉りされた建物から閉め出され行き場もなくうろつき、混合しながらいくつかの渦をつくる。大衆の臭気は彼女にとっては避難所のようなもので、たわんだ彼女の体

に適当な浮力を与えてふくらませてくれ、私鉄の階段のように、広告が肋骨に刷り込まれてくるような気分を少し耐えれば、朝を待つ落ち着きを、彼女にもたらししてくれるのだ。

車はまばらにしか通らないが、一台分のライトで彼女は二十人分の人影の行進をつくっては立ちすくむ。四階ほどの建物に斜めにたてかけられている長い棒がつくる三角の空にだけ、青い月の光がこぼれていて、大きな刃物が建物を切りつけている形に見える。大掛かりな殺人事件？ 夢中ですべてを記憶しなければならぬ唯一の目撃者である彼女は、事件に背を向けて薬局のブザーを押し、おりにいるシャッターをどンドン叩き続ける。

ほうっっておくつもりなの！ 切られています！

叩きつづけ、叩く音を含めた聞こえる音の全部は胸を大きく切り開かれた彼と彼女の心臓の音。

夜のなかから、大きすぎるくしやみがきて彼女の心配ごとをぶっ切れにする。

——あんた、何がほしいのさ、この店は朝まで誰一人いないんだよ、くぐり戸を叩きこわせば望みのものを盗めるだろうけどね。わたしは真面目だから、貼り薬しか欲しくないね、腕に竜が彫ってあるから貼って隠すんだよ。ブラウスから透けて見えたら大変だから。会社をクビにされてしまうのよ。夜も昼もかせぐんだから苦勞するわよ。でも呑んだ後、ぼうつと桜色になると竜がきれいに見えるんだよ、ときどき誰かに見せたくなくてねえ。だけどもいまは貼り薬の方がほしんだよ、すぐ朝からだ。紺色の服の女ガードマンという風体の女は手を口によせて、彼女に小声で話しながら幼女のように爪をかむ。

——どうして、なんにもしゃべらないのさ、何故叩くのをやめたのさあ。

——どうしていいか分からないんです。

——なんで？ あたしは世話好きなんだよ。なんてったって、竜があるからねえ、社員旅行で温泉に
いっても、ひとと一緒に湯につかることができないじゃない、だからいつも幹事を引受けるんだよ、
それで世話好きになっただけよ。

——ちがうのよ。

——わからないじゃないの。あたしに助けてもらいたいわけじゃないんなら、行くわよ。しっかりし
てちょうだいよ。

その女は暗闇に消えては街燈の下で現れることを繰り返しながら、真直ぐの道を歩いて行くが、八
本目の街燈の下あたりで急にポストになって、そのまま、決して動かなくなってしまう。

彼女は竜にびっくりしていて、注意深く女の後姿に目をこらしつづけるが、おののく彼の病気のこ
ぶを喉もとに呑みこんでいることに耐えきれなくなって、遠くで立ち止まりつづける女の影に対して
羞らいながらも、ゆるい調子でまたシャッターを叩くことをはじめめる。

彼女はつま先から頭上までシャッターと一緒に震えてしまうし、とんでもなく馬鹿馬鹿しい行為を
しているのではないかとのがたいがきて、むっつりさせられるし、誰でもいい殺したくなってくる。

どこか、かすかにゆるんで隙間ができたのか店のなかからただよってくる葉のにおいがある、彼
女はそれを吸い、シャッターの向こうを透視して、天井の照明の明るみや、軟らかく淡いガラスケー

スの反射光のようなものを飽きもせず食い入る見つめかたをする。店のなかへの羨望が彼女の胸をしめつけるが、すぐにシャッターは大きな障害物に戻り、もう一度叩けば彼女の方が平手打ちにあつて、手のひらをつぼめるよりしかたない。

彼女は彼の苦痛の遠雷を聞くように首をかたむけて歩を運び、時間に逆行して路地の夜に入り込み、顔に黒い塗料をぺたぺたぬりつけて顔のほとんどをふさいでしまう。それでも少し開いている穴をみつめて、彼女はそこからみる奇異なさかしまの世界を歩き、眼に入ってくる事物にこずきまわされることなく、空のずっと上の、彼女だけの地面から一足飛びにどこにでもいけそうだ。

むっとしていた昨日の群衆の臭気は朝のひえで透明化しはじめ、ほぐれ出してなくなり、彼女はこの一秒で百ミリバールの気圧の変化をおぼえる。

街路樹は陽を受け命を得て踊りたわむれ、彼女の体を突き抜けて駆けていく人々は、何かをしでかそうとしているらしいが、彼女はどの人物にも病気に酔ったというつましい顔を見る。病人の列、痛み の 連帯は幸福を呼んでいるが、それでも彼女は誰にも見せるわけにいかない宝として、瀕死の彼から来る苦痛を隠して、音もなく水溜りに落ち込んでいく彼女の死をこらえる。そのために、彼女は行きどころを失って迷子になっているらしいが、実は虫もカビも食わない異端の死体としてはじき出されているのかもしれない。

彼は長い間息をきらしながら眠り、覚めて息が正常に戻ると、両肩の丸い丘からひじへの腕の筋肉、首のつけね、体の両脇、腹筋、胸、いろんなところに無理があつて、筋がうずいている。筋の裂け目をかばうためのよじれが動き回り、たわんだ胸のかご型の骨までつぶれて、ただごとでなく痛い。四肢がくたびれたトカゲのように、手をぜんぜん使わずに体側につけたまま這つて、深いところや浅いところの異状のかたちを探っている。

朝、彼の起きぬけにこする顔がヴァイオリンの音色をつくり、外でおびただしい数のローラースケートの音が湧く、物と物がローラーをつけて転げ回っているなか、ときどき長く細い泣き声がとんで、紙でできている天の一角がバリバリと破られている。鉄柵から入ってくる陽光がハモニカ状に四角形を並べ、太陽から下に光の垂直に降りている海面からギラギラの行列がきて、彼女がまぶしき目に目をとじると、まぶたのなかは陽を通して血袋、まばたきをすると血がしぶくようだ。

死ぬと言うことはそう珍しいことではないのだから……。彼女は紙に映る彼の影を写しはじめ、途中で自分の影に載りかえる。ペンが動くときインクでさらに濃い影だけの連なりになっていくから、死のしるし、まぶたはこぶになって鼻よりも高く、鼻は丸く大きい頬のなかにほとんど埋もれて、まっげがトゲになって突き出し、そのまわりに髪がパラパラ散る。全部を真っ黒に塗りつぶせばできあがるのだが、出来上がる前に、彼女はしだいに想いに張りつめた叫びだけになり、線を一本ひきつづけ

る。

いまにも切れそうなほど、ぴんと張った線を引いて、彼女は何処までも綱渡りをしていかなければならなくなる。まばゆい白さのなかの、息のつまるような一本。ゆらいではならない、とぎれてはならない、手放してはならない、それなのにもう、あっけなく紙の終わりに達してしまい、彼に助けを求める小さな叫びをあげてしまう。

夜、彼女がペン先の一点を見つめていると、ペンは自然に動きはじめ、紙を明るいうちへ明るいうちへ引き寄せても、暗みへと滑っていく。筆圧は感じない、ペンの動くにまかせているうち、彼女は神様と書きつづけることになって、明日の朝までそれを二万回書けばからくも助かるのだと信じ始め、いつのまにかその作業を厳しく自身に課してしまう。気をまぎらすなどと言うものではなく、助けて欲しいとの願いが背骨の燃え尽きるほどの切実さになって襲い、最後の最大の願いになってペン先からほとばしり出て、書く文字のつみ重ねが生れて二十八年たった彼女のはじめての信仰になっているのに、手の動きは機械的に進んで、義務感だけとする誰かからの命令であるかのように、ただ書きつづけることになっている。信仰と機械のもつかさま臭さが合理的な思考を働かせる、横書きと縦書きのどちらが早く書けるか、偏だけを書き並べたあとつくりを付け加えるか、一列だけ縦に書いてあと横に並べて重ねていくか、一枚に何個書くか、彼女の助けてほしいと願うわき目もふれない思いがただ文字の計算にすりかえられてしまう。

やがて数えずに図形として神様の文字は列をととのえ、計算さえなしに進み、ときには九列しかな

いのにと数えて一列不足を十行つづけ、百について十不足になったりもするが、すぐに補填される。神様というスタンプがあったらそれを押せばそれだけ手間をはぶけるというものだが、彼女は自分に對して手間をはぶくことばかりしてきたから、最後に及んで、ここで手間をはぶくという不誠実は禁じられているのだ。

きちんと着ている服と手元の紙が、うすあかりをつぎつぎ裏側に押し流してあたりを闇にしていき、ずっと彼女と無縁だった神様という文字は、今この世のあらゆるものを信じないしとして浮かび、とんでもなく新鮮になる。

いつもの十倍も暗く、紙だけが光って、目に疲れて浮かぶホテルほどの丸い火に神様の文字は明滅しはじめるが、彼女は書きつづけてとどめることができないから、神様は二つずつ三つずつあわさり、さらさらと声を出し、また離れては並び、駆け過ぎては合わさって消え、整然と並んで蘇る。しかし今この世にある出来事はみんなみせかけであり虚偽であって、書いてある文字だけが真実なのにちがひなく、〈彼は死ぬ〉〈彼女も死ぬ〉彼女は死んだ一丁あがりの×印として神様の文字を書いたり、死創を消す膏薬として神様の文字を書いたりもするが、そんな遊びが大量に集まって一つの真実を構成するのだ。

彼女の書いた神様は二千になって、半日も書き続けたほどの疲れを覚えるが、何分も書いていないのかもしれない。二千五百になって、神の字はゆの字に、様の字はねの字になっているから、崩れすぎは訂正し、「ゆね」の暗号の意味を考え、それが彼女の願いに対する答えの一部であるかのように謎

ときをして見る。ヒントは得られず、彼女が口のなかでつぶやいているのは「ゆね」ではなく、神様だ。止めどなく口ずさんで、助けを求めるのではなく、書くための補助として口ずさんで、彼女は休みを与えられてはいない。三千回も書き連ねて、どこにも何時でもある砂のこぼれに似た音のなかに、つぶやき以外の、字を書く手の動きに協力してくれるリズムが生れ、それに導かれて書きつづけることが唄うように楽になって、彼女の真剣さがゆるみ、リズムはのろろしてきて自然に止むことになりそう。リズムが止めば彼女は書くのを止め、だから彼女は助からず死ぬという関係になってしまう。三千六百十六でそのリズムは終わり、彼女は手をとめ。わかっているのです、わたしがすぐに死んでしまうことなど……希薄な吐息を吐いて自分の死に涙を浮かべ、目に涙が充ちて、ピンポン玉ほどの眼球が所在不明になり、しばらくして眼窩にとぼんと波をあげて落ちる。そのしぶきに泣いてしまう。涙が紙の文字ににじみ、にじみかたが生死の鍵を握っている、濡れて滲む紙に三千六百十七から書き始め、つぎつぎ滲むくさりになった文字はにせものになり、にせものの数のなかから真実の一体をつまみあげるための引き算をはじめ。彼女は顔をあげて外の音を聞く、誰かが神を独り占めしようとする彼女の行為に対して文句をいい、彼女の真剣な願いを妨害するたくらみをしている。長い間、聞こえてくるものをじつと受け止め、眉の八の字を脛の弧の接線にして両耳まで延長するが、地球が鼻詰まりを起している音に振りとばされそう。外を見れば闇、命は流れ星にもならないで簡単に消え、助命の願いはやっぱり誰もがそうであるように、この文字でなければならぬ。それだからこの願いの空しさを覆い隠す迫力がある。

神の一千体はつづれ織と言うより氷の玉すだれになって、もう三十枚にもなり、彼女はその蔭に隠れているが、誰ひとり彼女の不在を怪しみもせず、非難もしない。助けてください、助けてください。彼女は眠気にとらえられ、机にうつぶす姿勢から床に場を移し、うたた寝をはじめて、書いている紙を体の下に敷いてしまい、彼女の体の細胞が重みでつぶれて、もっと全身をじゅうたんに伸ばして平たくなり、はっとすると輪転機に巻き込まれていく。背に刷り込まれているのはナンダ？ 彼女は気になって背を見たいが何か黒いものがちらちらするだけで見えない。すみませんが、わたしの背を読んでください。彼のいない部屋では答えがない。さっきまで書いていたもののコピーができています。背のせいせいと広い面にコピーされている神様の文字は左前で野心がなく卑小にみえる。まだらにコピーされて立体感のないはがれている平面、彼女自身が、たまたま開いたページから、ひき千切られた偶然なのだ。

彼女が白い毛布をかぶると底冷えのする空気が甘味を濃くして口に流れ込む。死神に対して百万回も首を横に振りつづけなければ救いはない。誰にだって嫌だといえ、少しは嫌だということ認めず、貰って来たものだが、神だけは、神に限って、彼女の嫌々も、祈りも、どれひとつとして受け入れてくれたことがなかった。神で埋まった紙は全部で三十二枚になっていて、きびしい寒気団は彼女の書いた紙から出ているのだ。

彼女が必死で書いて、書いた神に祈りながらペンを置いたとき、彼が息を引取っている。空一面薄紅色の雨の朝、こまかい雨がふるといふより流れていて、部屋から飛び出した彼女のまつ毛や頬のう

ぶ毛を真つ白くする。彼女は永遠に彼の死から遠ざかるようにただ歩いて、時々走り、屈み、たえまないざわめきを彼女ひとりを襲う嵐かと思いふりはらいながら、つぎつぎ花屋に駆け込み、そのたびに白い花なら何でも、空色の花なら何でも……ついに赤でも灰色でも花ならなんでも。抱えきれないほど買い込み、水滴でかすむ目のまわりを花の香でこすり、涙もいっしょに拭いっづける。涙の重みで花びらがゆがみ、重くなり、肩や腕がたわむまで歩いて彼女の疲れきって戻るところはやっばり彼の死の部屋なのだ。

彼は死体で、神は文字になり、それ以外のなものでもないが、彼女はそのどちらかを畏怖しなければならなくなり選択をせまられ、死体よりも、彼女が必死で祈って書いたその文字がおそろしくて、死体に助けを求めてしまう。神で埋められた紙は冷気を流出して、彼の死体にまだほのかに残る最後のぬくもりさえ徐々に奪い去ろうとする。彼女は彼の手のなかに顔をふせ、熱い息をふきかけながら、ふたりいっしょに凍結して数百年後に甦ることにさせてほしいと、彼女の後ろの壁際に投げてある週刊誌にはさんだ百万の神様の束にひそかに願っている。

その神の正体が死神であることがわかり、身のすくむ思いで背を向けて、死んだ彼に助けを求めつづけながら、同時に数百年後に一緒にふたりを甦らせてほしいと後ろに祈る矛盾は気にならない。

神様の束は非人情で彼女の願いのどの一つも叶えてはくれないで、全部を裏目裏目と意地悪く振舞うにきまつている。彼女は天邪鬼の神様の文字に、助けてほしくない、死にたいのだから凍死させて下さいと願ってみる、その願いを神は疑っている、疑われることは信じられることにもなるが、もう

文字のすだれは疑いや信の外側にほうりだされ、死にも眠りにもよろけなない機械になった。ペン先でただとめどなくはじかれ続けている。

死んでも眠りを欲して、彼女は淡いブルーのカバーのかけてある寝台にもぐり込む。触覚を失ってしまっているはずなのに、不可解なことに、生きている時の習性の延長として、やっぱり寝台でないと眠れない。彼女は蒲団のなかで布団蒸しにされた子供のようなありさまでひそんでいて、眠り、眠りのなかで発声して生きているつもりで話はじめると、あおりあげられる毛布、外から入り込んでくる足、それは彼女をシーツのように敷きこんで入ってくる彼女自身の体、足の指の先から共同体になりかわってこようとすする。夜のある時間になるとかたりと秤皿がさがってしまい、彼女は死者であることを否定する。またもあおりあげられる毛布、外から入り込んでくる足、彼女を犯してまたもこの場所を占めようとすする者。何トンもの、どうしても動かせない重みの甲の高い足は、細い骨の棒につらなつた鉄製で、死んだ彼のものだ。冷たくみごとに死に終わった後の体が、足をもつれさせている。これが幻からの解放？　すべてが始まってしまったみたいな、罪がすぐに追って来そうなの、息をつぎ、息を切らすことが要求されそうなの。ただ違っていることは、彼の眼球に彼女の書いた例の文字が

コピーされてウイックしていること。

朝は輪転機のようにくるだろう、生きていると偽っているものと死んでいるものを重ねてホチキスでとめる、一カ所、二カ所、三カ所、秤皿が上がりきらず触覚が残っているとしたら、喉にホチキスがつかえてしまう。

書いた紙は四十枚にもなっているからとじる。四万もの文字のざわめきは、ともすると死ぬまえの彼の声でもあるが、死神の視線の柱は見えず、ただ彼女の内部に服従の感情を芽生えさせ、もうさっきの彼女ではなく、呼び声に踊らされていて、向きをかえさせられ、向きをかえさせられ、死神のめない視線の柱に抱きすくめられ、熱い血の蒸気がのぼるばかりだ。

わかっていきます、わたしの坐っている椅子は点線、着ているものも、家も、みんな点線で仮にあるだけなのです。わたしも、わたし自身も点線なんです。彼女が必死で紙に書き連ねる神は紙になりかわり、紙は吹けば飛び、火をともしれば炎をあげる。書いて書いて百万回も、そのあとの彼女はハウキを持って魔女のように掃きつづけるべきなのだ。彼女は書きつづけ、書くためにだけ書く動きを続け、やすらかなになる。

廊下は両耳にガラスのかけらが突き刺さってくるほどの寒さで、彼女は青く澄んだ床を移動する灰色の雲のように歩いて、きめの細かい幾何学模様のガラスを通りすがりにぶつかってこわすことも出来るし、砕いた穴から外へ飛び出すこともできる、地上ははるかに下だ。

彼女が洗面所で長い間鏡を見て、鏡のなかの人物とは決して見合うことをしないのは、その人物が彼女に敵対する命の吸盤にちがいないから……。目が濁っているせいも、洗面所のマットは特別毛深くなっている。それは抜け毛がいっぱいついていて湿めり気があり、細菌がはびこりはじめているらしく、見れば見るほど敷物は毛深くなって、毛のなから影が湧き出し底でたゆたい、もっと覗き込むと、影は池の波で、誰かが乱れて濁れている。彼女は引つ張りあげようと水のなかに飛び込むが、飛び込んだ彼女ももう溺れそう。こんな時に、彼女は尿意を感じているのだ、尿意から彼女の体は逃げてても逃げてても、尿意はかゆみのように、吹き出物のようにつきまとい、ふくらみ縮み、ぬくもりをもってゆききし、腹のなかに吸い込まれる。いこか、いくまいか、後で……。目だけでなく全身に濁りがきているのに、トイレは彼女から遠のいていくばかり、追いつけない思いが重苦しく残るが我慢する。真の尿意ではなかったのかもしれない、意地の悪いだけの。死んで尿だけを残すつもりはないのだ。

彼女は部屋に戻り、机の前の椅子の上に乗る、鳥のように嘴も足も埋め、丸くなってしまい、スカップ型の羽毛を誇示して翼を綺麗に畳まずにいる鳥のように神様を二万回書き連ねた紙の何枚かを両脇にはさんで蹲るが、彼女はその紙を身震いするほど嫌ってもいる。

日は過ぎ、電話が鳴って、不躰な女の視線が受話器からのぞいている。

——いま、お化粧をなさってる最中なんでしょう？ お化粧といっても、パックでお顔をはりつめている最中だということくらいわかります。あなたは口をおききにならないで結構よ、でも、そうは言っても、一声くらい、あ、とか、う、とか言って！ おっしゃらないなら、私の言いたいことを言わせていただきます。聞いて下さるんでしょうね。あなたの彼は死にますよ、あの様子では……。だから、私は彼に病院に行くように勧めましたの。病院の選び方、病人の心の持ちかた、気がかりならと、遺書の書き方、死までの時間の用い方まで話してあげました。それなのにどうでしょう、目の前に張るままにしておいたクモの巣を、いっぺんに吹き飛ばすように、人はみんな知人になにか不幸がないかと待っているんだ、そして自分だけが誰よりも早く予知してみせたと誇りたい気持ちをもっている。お望みならご期待にそってあげてもかまわないけど。素晴らしい、ご期待ですってよ、大意はおわかりでしょう？ まます悪化して、もう手に負えませんわ。

彼女はあくびをし、口を軽く叩たたきながらそれを聞いている。隆鼻術などしたはずもない鼻筋に骨が打ち込まれて、ビビビとふるえ、ガタガタする不吉な思いにとらえられる。彼女は大声で叫ぶ。

——あなたの電話という災難に会って、わたしの容貌が台無しになりそう！

——やっぱり、色黒だからパックをやっていたらっしやるの？ それくらいのこと、我慢して下さいね、彼だけでなく人間なんて、すぐ死ぬのですから。容貌なんて……。

——彼の死相を、まるでわたしだけが知らない彼の情事の告げ口でもするみたいにお話になりましたけど……。

——彼もあなたも、私にとっては他人なんですよ、情事をとやかくは申しませんわ。

——わたしも他人なんです、ほっといてください。情事ってなに？

——気にするもしないも、他人の証拠だともいまいしょうか。ただ、あなたにできることを彼にしてさしあげたら如何かと、生死の問題ですから。

お助け屋の女に腹をたてて、彼女は首を曲げたり、蒼ざめた手で髪をつかんで額をささえたりしてぐずぐずしている。

ひとの言うことなど聞くものじゃないわ、絶対ましなことなど言わないものだから。わたしはよくうつ伏して、耳を床におしつけてみるのよ。何階も下のひとの声かもしれないし、何軒か隣のひとの声かもしれない話声が、子供のときつくった電話遊びの、ほら、ボール紙を輪にした筒に張ったパラフィン紙にピリピリする声が聞こえた、あれと同じに聞こえて来るの。ときには何もかもいちどきに聞こえてくるわ。建物はなにか薄い、ペラペラのもので出来ているんだなってわかる。たとえ、あなたが盗聴器をもっていて、どこかに取りつけたとしても、うんざりする話しか聞けないわ。体が悪いんじゃないか。気分がわるいんじゃないか。もっと食べなさい。疲れたでしょう。なんて、いわば生死の問題よ。生死の問題でも犯罪の計画なんか、絶対話していないし、ひとに聞かせたくないほんとの秘密なんか一つも話されていないのね。気分が悪くなるわ、だって、何時でもそんなうんざりする

話が、聞いているわたしを徐々に殺す計画に進行していくのよ。

　　またも電話が鳴り、彼女はいたずらっぽいな微笑を電話に向ける。

——わたしは何も言わないわ、彼が死ぬという、お助け屋のみなさんの白昼夢に、意地悪な訂正を加えるまねはしたくないもの。

　　彼女は女を煙にまいて、快い笑い声をたてている。

——もしもし、わかってるの？　どうしようもないというものでもないのよ、ね、聞いていらっしやいます？

——でも、本当のところをいえば、馬鹿げているかもしれないですけど、わたしも死の予感がこわい、怖くてしょうがないんです。

——で、しょうがないではすまないのよ。あなたじゃなく彼のことです、彼はあなたに救って欲しいのよ、きつと。くわしいことはお手紙に書いて速達で出しましたから何回か繰り返し読んでいただきます。いい年をして、そんな虫のいどころの悪い子供みたいな顔をしないで。

　　彼女は身震いして、お助け屋の視線のひそむ受話器に、手で蓋をして切ってしまう。切ってしまったもどこかでブーンと鳴っている電線の音は、かたまっている話し声が線のなかで徐々にほどけていくものらしい。

　　どのポストのなかにも、ポストの寿命とほぼ同じ長期間、内側のすみに張り付いたまま、一度も集配されずにいる手紙の一枚や二枚あるはずなのに、彼女のところに届く手紙は何時でも素早く来てし

まい、封筒は一部を彼女に破られ、便箋がひきずりだされ彼女の指ではじかれる。ゆるやかに回転する紙は絹のような柔らかい反射をして、彼女のくろずんだ顔色を白くする。

——あなたはひとりで彼を守るといふ頼もしい、きりりとした態度でいて下さらなければ……。実はこの非難はリレーされていて、あなたのところには到達したのです。彼を助けることをしなければいけないという責任が、ババヌキのババみたいにあなたにリレーされて、あなたはアンカーになりました。

彼の死は心暖かい女達によって、こんな風に扱われつづけていて、リレーの経路が途中で枝分かれして横にばあつと拡がったことがあつたらしく、それが全部彼女に集中してくることになつたらしい。「あなたこそ彼を救いうる唯一の人物とします。まさか、あなたが彼に愛されていながら、その役目を負担に感じるなんてこと、考えられませんもの」「彼の眠れぬ夜でうがたれたくぼんだ目」「ほんとは嫉妬でぴりぴりもするけれど、あなたにお任せいたします」彼女に狙いをつける一味の手紙や言葉はきまり文句だ。一人一人が百万種の文句を光線のように弾き出したらどうなの。彼女は読みもしないうちに裂き、聞きもしないうちに受話器をおき、そして待機してみる。なにを待機しているのかわからなくなるまでじっとして、一味が台本を自分達の感情で書いて、台本通りに彼女をあやつっているのだと結論を下すまで。

上は電車が通っているにすぎないのに、このガード下には、しずくが何カ所もおちてきていて、彼女の胸にも命中し、見る間に枝をのぼし、さかさの木のかたちに広がって服を色濃く染めてしまう。彼女は唇をすこし開き、しみをつかみ、それをじっと見つめながら歩き、運の悪いついでに自分なのだと思う。しみはずっと過去からそこについていて拭いても洗っても落ちない、脱ぐこともできないいまわしいものになってくつきり浮かび上がり、そこだけではなく、つまんでいる手にまで飛沫を飛ばして、みつければいくらでも存在を現わす汚れになってしまふ。ガード下はいっただって怪しい出来事の起こる危険地帯だから、雫だけでなく恐ろしい女たちもいて、ソバカスのある若い顔の女は彼女に握手の手をさしのべてくる。

——彼のこと気にかかりませんか？ ……本当のことを言わせていただくと、彼は敗残者なんじゃないかな、三十五歳にもなって助手で独身だなんて。上がつかえているとか言い訳がましいことを言っ
てはいますけど、つかえてなんかいないんです。椅子が空いているのは一年前からですから。生年月
日を勘違いして定年を四年後と思ひ込んで疑わなかった教授のこと、お聞きになりませんでした？
たまたま戸籍抄本をみてはつと気がついて、ただちに退職することになったんですって、かわいそう
に気抜けした顔で整理していらしたもののよ。あれから助教授が教授に、講師が助教授になり講師の椅
子はあいているの。敗残者といわざるをえないでしょう！ 問題はそこなんじゃないかしら、万年助

手ね。そんな自分から脱け出られない絶望！ 自分で自分を食うというあれよ！ それで異常に痩せてきて。でも何か方法がありそうにも思うのよ、あなた作戦を考えてあげなさいよ。彼に選ばれたのはわたくしではなく、あなたなんだから。

この女のほかにも、彼女に話しかけるために、歩み寄ってくる女子学生、立ち止まっている会社員、肩に手をかける中年女に、彼女は一度に出会ってしまい、何かを警戒して見回してしまう。

——彼のことでですけど、ドアを開けっ放しにして黒く細いふるえに困まれて、かあつと大きな目を見開いていて、すぐにも目尻から引き裂けそうでした。ほんとよ。彼は自分の命を憎んでいるんです。いつか、彼はバックナンバーの揃っている本の一冊が紛失したというだけのこと、子供のように教授から油を絞られていましたの。後で何処かから見つけてきたその本のコピーをとっている様子といったら、もう体が衰えていて力がでないものですから、体を半分に折って、体重の全部を本の上に乗せて、ようやく本のページが飛び上がらないように押しつけることが出来るというありさまでしたわ。見かねて手伝ってあげようとしたけれど、拒否されましたの。きっぱりと！

——そうねえ、誰かが死ぬということも、ひとが私の言葉に耳を傾けてくれないということも、よくあることなのね。私が腹を立てるのはおかしなことだけれど、人情として彼をほうっておけて？

女達は女達同志で金切り声をあげているが、背景はかがり火でも燃えている感じに、店の広告が真赤だから、毛冠を逆上させ、翼をばたつかせている鳥たちのけんかにも見える。

——彼が誰よりも何よりも大切にしている彼の死を、あなたたちに見せたというの？ なんであなた

たちに見せたのかしら？ 見せる筈がないとおもうわ。彼の虎の子の死は、カギのかかった箱のなかにあるのよ。そのカギはわたしひとりがこのバッグのなかに持っている、ほらね、ふくらんでいるでしょう。

彼女は書いた紙の入ったバッグを誇らしそうに叩いてみせる。

——彼の命を見つめて、嗅ぎ、聞き、助けるために全力を尽して欲しいそう言っているのよ。

——何故かしら、彼は充分に生きているのに？ 今死んでいて、もうすぐ生まれて新しい一生が始まるというほどの、完璧に真新しい太い生き方をしています。あなたたちの予感狂っている、何故、助手だと敗残者なのかしら？ 何故、みなさん、彼にそんなにこだわるんです、おかしいわ。愛情がなければ予感も無責任で百八十度狂うものなのね。死にそうなのはわたしの方よ。あなたたちのせいで、こんなに憂鬱になって死にそうなのはわたしなんです。

騒々しくはじける彼女たちの言葉が、漸く減速して行く。

隠れ家のドアをはずされ、壊され、彼女に動悸だけが残されて耳障りな音をたてている。トトトトト……先へ急ぐ音と、テツテツテツ、時間を引き戻そうとする太い内向的な音と、もう一つ慌てふためいてリズムの狂っている音が、三つ混じり合って一つの苦痛のきざみになって、ところどころきざみの三つがぶつかり合い、爆発を起し、大きく腫れあがった腫瘍のいただきに、花の蕾を開花させる。彼女はその度に鎖骨の下を押さえ、靴音がとまどう野蛮な喘ぎを聞く。こうしているうちに、街中がみんなの吐息ばかりになって、均衡が破れ、外に向かって街ごとめくりかえってしまう。

窓から血相をかえた首を出し、人々をかきわけて行く車の中に五人の女の顔を見る。一人ずつ歩く必要はないのだった、一人ずつ動悸を打つこともない、集中血液循環装置が一つあれば、この街のみんなは永久に生き続けることになる。一人ずつ呼吸することもない、集中呼吸装置にまかせてこと足りるだろう、しゃべりまくる口も一つですむ。

まだ半分生きている彼が、退屈をまぎらわすために鳥を籠からだしている。黒い羽にグレイと白い線のある一羽と、羽は青みがかかり、尾は赤で首に黒い線のある鳥の二羽は、風に向かい一本脚で立つてバランスをとっては、羽をばたばた動かし、ちよつと位置がずれると、すぐまた同じ場所に戻って位置を訂正する。繰返して大変な量の動きをしているが、結果として同じあたりにいる。彼は示威するように、遠くに行きそうもない鳥に向かつて棒をかまえ、狙いを定めるまねをする。鳥はそしらぬ顔で何の反応も示さない。彼女はホーツホーツと叫んだり口笛を吹いたりして、明るい声をあげて追い立てている。

——こんなにうまくいくとは思わなかったよ。大きな家なんだ、まさにものすごい幸運の一語に尽きるなあ。鳥の世話をさせられるにしても。

外国に赴任した教授の家の留守番をする彼は、庭園の木からたちのぼる蜜の匂いを吸い込みながら、彼女に話している。

——この日暮れは随分感じが違うんだよ。写真のネガみたいに空一面に黒い星がまぎれ出てくる、星が輝きを増すと一つ一つは黒い十字架になって面積をひろげるが、よく見れば満天は木の葉、夜はとくべつ木の葉が開くんだ、木の葉が夜の正体なんだよ。樹木の多いところでは孤独が爆発するような夜の来かたがあるんだね。

彼は木洩れ陽のまだらを顔に受けて、不健康や気力のなさをごまかしているが、彼女には、この木の葉の葉脈は人をだます動物の爪あとのようにも見えて来る。

——この結構な家も土地も木も鳥も、あなたのものではないのだから、感情移入しては駄目よ。何もかもがあなたの頭のなかで、固有のお化けになったら怖いよ！わたしの部屋でさえ、夜になるとガラスの奥が怖くて遠いんだから。この家のどの部屋もどの家具も、あなたの所有物としての機能を持つてそうなのに、使用禁止の張り紙がしてあって、あなたの前で塞ぎ込んでるように見えるわ。幸運が去ったら、あなたまで塞ぎこむことになってしまうに、違いなもの。

池のなかでぎこちなく動いている生物がいる。彼女がいぶかしむと、彼女自身の口、早く話し終わって、彼の動悸を整えなければと思っている口だ。彼女は親しいものに出会った気で、涼しい顔をして、シート、人差し指を口の前に一本押しあてて耳をすまし、呼吸をととのえる。

——わたしの得意は口に指をおいて、シートということよ。何時だってわたしは理屈に合った話し方

で、あるいは号令で、人を意の俣に動かしたことなどないの。だけど、シートといえば、それが流行の伝染病のように何人か何十人かに広がって、何時の間にか驚くほど大勢の人間が、静かできちんとした姿勢になったりするから面白いのよ。

彼女は彼をシーンとさせ、しばらく時間のなかに閉じ込め、古墳のなかに埋もれつつある思いに固定しようとするが、注意力に息切れが来て、彼に話しかけられてしまう。

——その髪はカツラじゃないの？

——わたしの？ あなたは？

——きみのその髪。

——どちらだつてかまわないでしょう、男性と違つて、中がまるつきりカラツポだということはないのだし。

彼女は奇怪な偽装の女と勘違いされているのかと憤慨し、髪をこっそり一度きに抜き取られた覚えのないことを強調して髪を彼の眼のゆがみに向かつて引つ張つてみせる。そんなんじゃないわ。

——きみはまだ一階から十五階まで同じ位置にトイレのあるあの建物に住んでいるの？ あそこに行つたとき、人間はなんとほほえましい動物なんだろうっておかしくなつて笑つてしまつたんだよ。いまきつと十五人が一直線に重なつて腰をかけているにちがいないと思つてね、そしたら消毒の臭いが、どこからともなく臭つてきた、そんなものさ、ほほえましきは弾圧されている。

話しながら外から家の中まで、彼はあらゆるものに公平に笑顔をふりまく。いまは、家具にも、グ

ラスにも、ガラスのなかを横切る光にも、部屋のすみで抱擁中の虫たちにも、彼女にも。だから彼女は首輪をかけられてもキョトンとしている動物のようにいて、記憶のなかの彼の顔をつぎつぎ打ち消したすえ、膚も髪も目も青黒く痩せ果てた彼をあらためて観察している。

——玉葱の皮は外側の何枚かが枯れて乾いてしまっても、中はクリーム色でつやつやして、けろりと生きている、だからあなたはきつと芯に近いところでは健康だと思うのよ。同じ玉葱でも、外側だけが申し分なくて、内部はどろどろ溶けているものもある、わたしはあれなんです。かすかな玉葱に似た匂いがひろがっていくのを、彼女は嗅いで、死は匂いのカサにつつまれているのだと思う。死んだ、あるいは死ぬ前の、彼の皮膚の毛孔から生れ出ている死のかおり、そんなもののために、彼女が彼に話す言葉はやや重みをおび、よどんで、ひとかたまりになり、天気図の渦のように、果して彼の方に進路をとるのかどうかわからない。

彼女は頸椎がよじれるほど首をかたむけ、ガラスに映る自分の顔色と彼の顔色の両方の変化に監視の目を光らせ、鏡を出して反射光を天井に飛ばし、彼の手がタバコを取り出しライターから火を吹きだし生暖かい鏡の中かが黄色くなってしまいうまで見つづけたりする。彼女は急に病床で寝返りでもうつように大仰に彼を見て、ふいに汗びっしょりになってしまう。

——あなたは知らないでしょうけど、今、何人もの女の人の願いがわたし一人に任されているようなのだ。といったもある一味があなたを助けるといいながら、わたしに狙いをつけているんです。名目は殺し屋の反対の、お助け屋と名乗っていますけど、結局、彼女らは見込んだひとの死ぬまで狙うんだ

と思います。つけ狙われて殺されるのは、あなたじゃなく、わたしの方なの。いいえ、心配りはらないわ、笑って見ていることです。あの人たちは予想が大好きらしくて、三日後死ぬとか、三ヵ月後死ぬとか、ゲームを楽しんで、ひとの生死にカケをしているに違いないと思うのよ。早く死にすぎても困るんでしょう、きつと。あのひとたち、優しそうなことを言って、ボランティアのつもりらしいけど、殺し屋とどう違うのかしら？　あなたも、わたしも命を他人に明け渡してしまったような表情をしているから、いけないのね。

家具も光もまわりはすべて顔を見合わせて通じ合い、なかったものが一つ増加したのか、ほうきが一本さかさに立ち上がり、いま空間を飛び回るのを止めたばかりの微細なかけらの降り遅れた部分が、そうっと床に積っていく。

彼女は顔のほうぼうを悲しそうなちくちくする凹みにして、大きなバッグから紙の束をつかみ出す。——書いた文字は死神ではなく本ものの神様よ。ほんとはわたしの命の絶える思いで書き始めて、いま、命の保障としてある文字なんだけど、あなたに対する愛の表現にすぎなかったと気づいたんです。誰にも脅迫されずに自発的に文字をこんなに書いたことが、かってあったかしら？　わたしには自分を犠牲にするほか、あなたを救う方法は思いつかないの。わたしが死んだとしても、すべてが涸れてなくなってしまうたというものではなく、再生する前のちよつとした沈黙だと思って下さいね、付き合うのが出来にくい状態ではないんだから……。

彼女は絶え絶えの思いではじまった助命嘆願を仰々しく彼にプレゼントして、それに対するお返し

めいた言葉を期待するが、何一つ返ってはこない。

——ほら、筆だこができてしまったのよ。わたしのためではなく、あなたのために……。なにも出来ないから、彼女は筆だこまで彼にプレゼントする。そして、まだ光っているだけで盛り上つてもいない筆だこに爪をたてる。

——筆圧をかんじないたちなのがいけないのね。これ、この文字全部で何個あると思います？ 彼女は後ろへ髪を振り、丸いあごをあげて笑う。

——蜃気楼とは違うのよ、形があるわ。

さかさの箸は、なにかがもぬけの殻なのかも……。

顎をうめて、かすかに意味のないうなずきかたをし、椅子にもたれて居眠りをする彼を彼女は物憂く眺めて半時間もすぎすが、彼女自身にも正体不明の病気があって、そこから押寄せ、息づまらせるような圧迫感で動けないのだ。ちよっとした息のつなぎかたのミスで、いまにもあつと終わりがつかみ出されそうな。気がかりになって、不快の核心であるかもしれないテーブルの上の紙を引き寄せ、彼の眠っているのを横目に見て、再び自分のバッグに納めてしまう。

彼女は不意打ちにつぶやきを断ち切られる。彼が眠りから揺り起こされてもしたように立ち上がり、この部屋から出て行くところだ。彼女は急いで彼の後をつける、よく見れば一年分もある埃が、彼女の動きで舞い上がり、たじろいでしまう。掃除は現在使っている部屋だけに行っているから……。ふわふわとした足跡の埃のふちは、綿毛になってそっと歩いても、足もとで小さなつむじ風をつくる。彼の足跡は廊下の途中で止まって消えて行方不明になる。彼女は足跡の上を埃をちらさないように歩いてきて、最後の足跡の上に立つが、もはや彼女が歩いてきた足跡としかいようがなく、彼が歩いたのだという信ずべき証拠の相当部分は消えてしまう。彼は、彼女が振り返る足跡のずっと向こうの始まりよりも向こうの廊下の果てにおり、ふたりの間は連なる足跡、彼女からみると自分につま先を向けたものばかりだが、どこかで逆転して彼女の方に向いて並んでいる。ふたりが手を差しのべ、足跡をたどって歩み寄れば、埃もふたりの盗賊の出会いを陽気に演出してくれる。彼女が足跡をひとつ飛びにして埃の雲のなかを走り出すと、彼は鬼ごっこでもするように横を向いて脇のドアに消えてしまう。

ドアを開ける、ガラス戸があり彼はその向こうで、切り込まれた方眼の色分けによって姿を作り変え、三秒、四秒、時間の動きで、こんどは大きなカットグラスの中、八角形の顔、八角形の体になって再生し、七秒、八秒、あるカット面では、彼のどこかしれない一部分が幻想的に拡大されて薄紫に染まっている。別の面には普段と変わらない平凡で無頓着な彼の眉間があり、その下の面には、髪の毛が生え際が、凶案化されて。彼はガラスの面の一つ、二つで、二三個半のボタンをはずし、少し、もう少し、もつとぐつと、何コマものなかで何種類かの俯き方を同時にして、彼自身の体という妙な色分

けの断片や線書きの機械に彼はじっと見入っている。

——ぼくは自分で自分の死を予想して賭けているんだ。あそこも、ここも、そこも、おお、はかどっているじゃないか、馬鹿にせいがでているな。がんばれよ死神、おれは楽しんでるんだから。一秒後におれは死ぬ、いま予想外れ！ 一秒後おれは死ぬ、おおまた予想外れ！ 当てる楽しみが一生の終わりまで続くことは確実さ。死神のいるゲーム機はおれのものだ！

彼女は、彼の体の、色や線の破片で構成されたとめどなく変化する形と向かい合っている。

——当てる楽しみだなんて、樂觀的なこと、屈託のないお話ね。恐ろしいものを知らない子供みたいに、おへそのゴマでもほじくるみたいね。でも、もしかしたら、それほどまでに死んでいるということかしら？

そこで彼女は笑い、返ってくる彼の氷のある笑いから逃げてさっきの部屋に戻ってしまふ。

テレビの前で現実の時間を呼び込み、ほっとして椅子に坐ると、彼女の尻の下で擦り切れる服とツールが絶え間なくうごめいてとめどなくなり、繊維同士がこすれていらだち、けばを尻の中心へ中心へと巻き込んでいき、繊維の硬いところだけが残り、強力な渦の運動はミキサーになって彼女を下から目にもとまらぬスピードでひっかいてくる。削った粉の雲が撒き散らしているそれを、彼女はスカートでかくして音を消し、足を落ち着きなく動かし、神様の文字で埋もれた紙一枚を取り出して、上に書く。

——わたしは何かとても変な気持ち、足の数がタコほどにふえて、スカートのなかで、もみあつてみ

せるんです。この図を見て下さい、とても変わっていると思いませんか？

彼女自身でも判読しがたい図を描いている。彼女は理由を考え出すために、自分の秘密を暴きださなければならぬような、憂鬱な宿題を背負い込んだ気分になる。足にとつては、足の付け根から上は重荷なんだけど、……立ち上がると、彼女が腰をおろしていたスツールはスツールではなく、スカートから現れ出たのは、彼！ 蹲って居眠りをして、体をまるめ、胸のなかに腕も首も足もしまいこんで、人間であることをすっかり忘れきっている彼だ。

——スツールだとばかり思っていたわ！ 暗いからいけないのよ。それとも、目が悪くなったのかも？ それにしても、何時戻ったわけ、そんなに早く？

彼女が窓を開け放すと、木の花が風にふるえて生きて見えるから、灰色の奇怪な塊の彼は確実に死んでいると見えてしまう。

——たくらんでいるのね、わたしを屍衣にしようだなんて。死んでいるのでなければ物体になって知らん顔などできるはずがないもの。そうでなければ、わたしの方が、重みのない何かなんだわ。

彼女は彼をゆさぶる。まわりの空気は皺を寄せても彼は動かない、もはや、彼女の力ではどうすることも出来ない物としての秩序に組み入れられているようだ。

——あなたはそれが、気に入っているのね。今度来たとき、あなたの位置が違っていたりしたら承知しないから！ 何故、そうまでして死をもてあそぶの？

呟きながら、彼女はきつく振り返る。ときどき、きつく振り返れば、何ものかが、素早く隠れて、

彼女に対する悪意のあるくらみのひとつは、見事につぶれる筈だから、何度もそれを繰返す。その度に彼女の意図は成功していて、まだ何ひとつ後から来る被害に逢っていない。彼女はあまりうまくいくために気づまりになりながらも、とことんまでそれを続けて自分を守りきることにずっと固執して、次第に戻らない恋人を待つような振り向き方をする。

こんなにぐいぐい首を回してばかりいたら、脳が遠心力でふり出されてしまいそう。一体わたしをもてあそぶ張本人はだれなの？ 今度こそ逃げそこなったら、あなたをしつかりとらえて、拷問しても聞き出さなければならぬことがあるわ、覚悟していてほしい。

西日がダイナミックな太い線で建物の輪郭を描く。風景はすべてを三角にして、遠い彼方にすばまっつていく。彼女は自分の部屋に戻って、ゆっくりと内側から錠をかけ、またもぐいと振りかえる。なにも見えはしないのに、今度は見えないものにこずかれて気の抜けた体を押し返えさせようになり、素足の十本の指を床につきたててこらえる。きつく振り向いても退治できないものが、まだ彼女につきまともっているのだ。彼女はバグを砲丸投げの弾のように投げ出してしまふ。

なかみは書いた紙の束ではなくて、彼女に電話や手紙をよこしたお助け屋、あるいはとり巻き。彼

を救う責任を押しつけてきた女たちのスイカやカボチャや、冬瓜みたいな頭たち、袋から取り出して、放り出されてころころする顔は、このまま生かしておけない数個なのだ。こずるい細い目を持っていて投げ出されても上目ずかいに彼女を伺いつづけるから、彼女はペンキを塗りつけていく。

——青は、こすつからいおまえたちの色だ。目も口も鼻もペンキでふさいでしまえ！

彼女は歓声をあげ、スカートを広げて床に座りくつろぐが、もう一度きつく振り返れば、死神が彼と瓜二つに違いないとの予測もついている。

——あなた達のお手伝いをしましたから、どうぞ！そこに転がっている首たちをご覧になって下さい。

どこまでも伸びる影の時間、彼女は窓から手を伸ばして、手の影を数十台の車の列の上に置くことができるが、そんな魔力は長持ちしない、夕空の底の赤があっけなく蒸発してしまうから。

彼女の濡れた長い髪が夜風になびいて快い、気楽ね！生れてから気楽に二十八歳まで年を重ねてきて、真面目に奸策をめぐらし、どんなごまかしも休んだことがなかったのだから、彼女は軽く自分をごまかすやりかたで、自分を救うことができているのだ。着ている薄色の寝巻のフリルやギャザーが沢山あって、鼻唄をうたうと、首回りで柔らかいキノコ雲をつくったりする。現実の世界を按配する、ぬるま湯も、熱湯も冷湯もコントロールする、心のボタンを人間はもっているから、眠り、眠りのなかで更に眠り、夢をみて、夢を朝まで残さず消してしまうのよ。彼女より多少遅れてきて、彼女より絶対前に出ない男性が大勢いるし、ちよつとした交差点で足踏みをして、夢の千の足跡を消すた

めの居眠りをしている女たちもいる。自分を救う行事なしに眠る冒険が、寝る前のスイッチひとつでたやすく出来るから、彼女は目覚めてすぐにその冒険の大きさ、無暴さに肝を冷やすのだ。

夜明け前十分、真暗い夜と朝のすきまに糸ノコギリ型の真紅の海が見え、すぐに黄色にうすれ、夜と一緒にあっさり去って海は色なしになる。

彼女のもつエンピツは影をV字型にして動きはじめ、いつものように紙面は光を招いて、かあっと明るいののに、にぎりこぶしのごつい影のなかにぐいぐい潜り込もうとする。芯の先が絶望の種に。助けてください！　そこで折れてしまう。

彼女は膝のとび出したジーパンをはき、彼にプレゼントしそこねて、自分が着ることになってしまったL判の男物のセーターを着て、バーゲンセールルのデパートに入る。彼女はごちゃごちゃに置かれたセーターの山のなかから、彼に似合いそうなものを次々選り出しては鏡の前に立ち、顎の下にあててみる。真上からだけ光が落ちているので、彼女は目の下に大きなクマをつくり、頬骨の下は暗い大穴になって、どんな明るい色も暗い色も全くそぐわない。

彼女は真剣に下だったものを上に引っ張り出し、売り場のすみまでひっくり返し、引き返しなが

もう一度かき回すと、彼女の着ているものとそっくりの品物が幾つも姿を現わしているのに出会う。彼女はそれをつかまえ、慌てて、まずいものが出てくるわ、こんちきしょう、そのセーターを下へ下へ潜らせるが、もぐった脇から隣りにいる女に引き出されて、投げ出されてしまう。彼女は、それを誰の目にも触れさせたくないという、妙に強情な気持にとらえられて、ぐいぐい押し込む仕事をいつまでも繰返す。彼女の四五人向こうに立っている女は体を乗り出して、彼女が押し込む手を意に介さず、袖が倍に伸びるほどセーターを引っ張る。それは彼女の着ているものだから、彼女は体をセーターの隅に縮めて悲鳴を上げてしまう。

——わたしの手じゃないの！ よく見て下さい！ 涼しい顔をして、わたしに恥をかかせようとするのね。結婚をした女って、そういうところがあるんだわ！

彼女は長く伸びた袖をたぐりよせ、形を整えながら店から出る。セーターのなかに形のない自分があるのだ。ぼったり逢ってすれ違うセーターも彼女のもので、近づかないでよ！ 後生だから！

叫びつづけ、紙でふくらんだバッグを大荷物のように肩にはねあげて担ぎ、またも振り返るが、街は雑踏で、すれ違えば、もう、無限に退いて行ってしまい、見覚えのある物も人も、もう存在しない。

彼の家に、入れ替わり立ちかわり、出入りしている者たちがいて、顔を上気させて馬鹿騒ぎを演じている。

突然、戦車が狂い出したほどの轟音が聞こえて、築山のかげを廻って二十年も前の中古車が現れる。

——卓球台を借りにきたわ！ 教授の許可は受けているんだから、あなたの悪いようにはしないわ。気にしなくていいのよ。あなたには関係ないことですもの。

——コールテンの紺色のパンツの姉弟が両手を振りながら駆けて行く。

——この家の夫婦が二年後に帰って来たとしても不必要なしろものだし、捨てるために苦勞するんじゃないかなとも思うから、勝手にさせておくよ。彼は呑気に言い、

——グラントピアノも持っていったらどうなの。と彼女は少年達にいう。

彼らは床に直線や曲線を描いて、派手に床を傷つけながら運び出していく。がらんとしてしまった部屋で、彼女は直線の上を歩いたり、曲線を跳んだりする。外は晴れ上がり、少年達はそれ自体を太陽光線にして作戦の成功を祝っている。

——こんなに正々堂々と泥棒がやれるなんて！ やましがったりすることないさ。秩序を破壊することにならない窃盗団なんて、迫力ないけどなあ！

泥棒たちは話しながら、快い夢とばかりに力仕事の拍子をとって、ステレオも数百枚のDVDやCDも、ゴルフバッグも、サーフィン板も、鳥籠も、テントも、鼻から滑り落ちそうなサンングラスまで、ちやつかりかけていく。

——ピアノのキイは？

——聞くことないでしょう。彼は留守番、あなた達は犯罪者なのよ。

彼女がいうと、グループの一番年かさらしい女は、引出しから引つ張り出した幅の広いベルトで、オーバーに腰をしぼり、吸っていたタバコを長いまま投げ捨てると、厚底の靴で踏み潰してみせる。女の足もとからひとつまみの煙がとぶ。

——二年後に帰っていらっしやるなら、それまでにもと通りにしておくわ。もと通りなんて出来ない相談かもしれないけど、あなたは、どっちみち、その時点で責任を問われる心配はないわ。わかっているから笑って見過ごしているのね。女は二人の前で情容赦しない。

——何をいつてるの、死にそうなのはわたしの方よ。彼は生き残ってあなたの罪状を逐一報告するでしょう。楽しみにするのね。

乾ききった埃を排気ガスで吹き飛ばし、殺人に餓えていそうな車は突き進んでいく。物の消えた開放感と軽やかさが来る。他人の欲するままにしておく容易さ。ほんとはあなたが、ものを消す術をつかったなんてわかっているのよ。大きな家具のなくなった部屋に散らばっている新聞紙を、彼女は拾って二つから四つに、そして八つにたたみ、袋にして、小さいチリを集める。彼が袋を奪って逆さにするがチリは落ちない、彼女が目をこらすと、彼は手を裏返し、もう一度手を裏返すと、新聞紙はなくなっている。

——物が液体になることや、気体になることなど実験でわかっているだろう。

確かにその手の裏返し一つで、あなたは家具を消してしまった。ささいな塵や、新聞紙にそれなりの価値を見つけるにしても、重大なことを抹消してしまうのは、あなたの性格だというわけ？

彼は疲労したのか、もう、口をきかない。彼女はよるべなくなる。

小刻みにはねてみながら、眺めるものをへいげいするような部屋のたたずまいに不信を抱く。ここは目隠しされたまま飛び込んだ部屋。部屋の隅にいると中央に、中央にいると周囲に、招き寄せられる怪。四方のすべてが塞がれていると装いながら、無味無臭のたちの悪いガスを充満させている部屋。頭の向きさえ変えれば彼がいる。彼は、病気でなく、病気でなく、死ぬ、死なない、死んでいる。彼女はこの部屋の外にしか生死は関係しないのだと理解していて、かまわず喋り続けようとするが、すぐに叫びをあげてしまう。

——あなたは、命知らずだった！ わたしは間抜けで、命知らずと粗雑なつき合い方をして来たのね。振り向いても彼女のバッグはない。瀆神行為の罰で、彼女は手荒く捕らえられ、逃れようとしても、ふたりの行動の混乱振り手は手の先端でつながり外に向かって回る渦の運動を引き起してしまう。心中心めいた死に方はしたくないのよ。彼女は電氣的な喜びにも似たつらさに泣いて、泣き声さえ足の裏に衝突させつづけ、手の先端を次第に遠くし、ふたりは二本の時計の針のように回って振り切れ、六時三十三分とか、一時三十七分とか、針が一直線になったまま動きがとれなくなる、壊れ時計。脳は足の裏から飛び散って、ふたり一緒に分子のつなぎ目をほどこいていく。

彼女は以前の目印のすっかりなくなっている三階建の道路の一番下を歩いている。排気ガスで喉がからく痛くなり、咳をし続ける。彼女だけではなく歩いていく誰もが吸う息をなるべく少量にするために胸を小さくして、いつ死ぬかわかったものじゃないという顔をしている。人々に向かって首をうねらせて向かってくる灰色の鳥は、生きていくための力不足に陥って、最後の命がけの仕事を始め、胸の奥まで痛くして歩いている人間の方がもう、死臭を発しているのかもしれない。既に半分髪をついばまれた老人はたまりかねて路地に逃れ、自転車の少女は競輪の選手のように体をうつ伏して必死でこぎ、誰もが死の力ばかりを信じている。それは生まれたときから、信じられるものは、それしかなかったものの不幸。

彼女は排気ガスに犯され、麻薬をかいだように道路に引き摺られ、一番高いビルを目標に歩いて行く。目ざすところに辿りつく前に、道路は行き止まり、地軸が都会の真中で抜き取られた穴の回りの螺旋状の道路をめぐって、車だけがつきつき降りていく。道路には彼女だけ隠れミノを着た潜行者みたいに立っている。彼女以外のすべての人は、車という甲羅を着ていることで正当な人間としての資格をもっていて、行先があり、地の懐深く保護されにくらしい。そうならいいが、もしも、面倒を起さず土のなかで消え果てるために行く車の列だしたら。

水面に風景が倍にひろがって見える河畔のバス停に、彼女は回り道をして辿りつく。主婦達が三人そろって同じ大きさのスーパ一の袋を、ここらもち腹を突き出した上に載せるかたちで持ち、一つの頭脳が三つの口をいちどきにあやつる。

——彼はね、ご厚意ありがとうございますといいましたのよ。

——そのご厚意によって殺されてしまいましたわ。

もう苦しくて口もきけなくなっていて、それが困るとはいえなかったのでしょうか。

——扇風機を、枕もとに一つ。

足もとにも一つ。

二つ同時にびゅうびゅう吹きつけていて。

——少しでも涼しい方がいいと思いましたがのね、あのボランティアの馬鹿な女。

——それで彼、脱水状態になって。

死んでしまいましたわ。

殺されてしまいましたのよ。

話しながら、臉をちかちかさせて笑い、そんな死に方が平和なのだ、大変なショックなどあり得ないと、囁きかわして。女たちは死者と縁もゆかりもなく、埋葬することも、目を濡らすための水滴さえ必要としなかったのだ。

主婦達の向こう側に男が三人、ともに片足をカタカタ動かしながら話している。貧乏ぶるい。

——彼が出勤してこないということだけで、どうかしたぞ、おかしいんじゃないか、死んだんじゃないか、ということになってね……とすると、死後何日経っているかを数えられることになってしまい、ついに彼の家に行つて誰がドアを開け、誰が第一歩を踏み込むか……そんな話になったのさ。みんな二の足を踏んでさあ、結局、彼は死んだままだということになる。

彼は世界の何処にもいて、それぞれの場所で死んだり、死に瀕したりしているにちがいないのだ。彼女のよく知っている街のどの部屋にも、彼の顔はあつて鎖になつて繋がりに、それはにじんだ文字の神たちに似ている。男たちのひとりが、そこにいる主婦たちに声をかける。

——皺が寄つてますよ！

主婦たちは袋を下におき、羞らいつながら、それぞれにストッキングを直そうとする。

——そこじゃない、もっと上、カンが悪いなあ！

暖めているスプのなかに、彼女がちよつとそばにおいた靴下が落ちてしまい、彼女はあわてて抱え込むかたわで汁を掻き回してしまふ。彼が鋭い目で彼女を見つめているから、捨てるチャンスが見つかからない。しばらくして彼の眼を離れた瞬間、やつと掬い上げ、そしらぬ顔でゴミ籠に入れてしま

う。

彼女は彼の食欲をむなしくさがす。彼女に分別と無分別が五分五分にあつて、五分の分別が、ざまあみろ、食べないじゃないか。といい、無分別が突然後ろをきつくふりかえる。誰かいる、隠れた。

——あなたとわたしはいまこうやって同一平面上にいて並んでいることができるのに、わたしの後ろにいる誰かは大分高さのちがう傾斜の低い方にいるという気がするの。それで引つ張られている感じなんです。その誰かは一週間前のあなたか、一週間後のあなたかのどちらかなだと思つうわ。わたしの覚えている一週間前のあなたは少なくとも食物の匂いを嗅ぐと、粘膜から消化液を分泌しているようだったわ。実在しているものはみんなあなたに力を及ぼしているらしかった、覚えている？ あなたの熱い汗にぬれてわたしの手がすべり、体の均衡がくずれて、あなたに腰の骨が碎けるほどつかまされたのをおぼえているわ。いまあなたとわたしは、こうやって同じ生命の空間にいるのに、さつきから一ミリも寄り合おうとはしていない。後ろのあなたは違つていて、いまのあなたと敵対関係にあるらしいのに、少しづつこっそりとわたしに寄り添つてきているのよ。わたし達は三角関係なんじゃないかと思つうけど、結局後ろのあなたにしたところで、きつと板ガラスの向こうを抱き締めようにも、ただ指先が滑るだけ、なにも出来はしないのね。生命の空間がいまのところ違つている。あなたの過去が死んであなたの未来も死んで、どっちも死神の一味らしいわ。そのひとりがわたしの後ろにいるのよ。恋しくて、涙が湧いて、あなたに恋文を書いているんです。恋文の厚さが命の空間を区切るガラスの役目をしているに違いないわ。わたしは病気の、病気であることがつまり恋をしていること

になつてゐるんだわ。あなたが病気になる、わたしも病気になる。それが証拠よ。でも、わたしの見ていないすきに、あなたや他の誰かが舌をみせたのを見たという気もするのよ。

彼女は腕をぶらぶらさせ、腕の関節の熱を耐え難くして、笑いながら、彼と自分を慰める演説をする。彼の食欲のない乾いた唇を感じようと、人さし指を一本もつていき、彼を押し戻すように体を傾けて立ち上がる。

それより先、彼女の前を彼がするりとすぎるから、彼女は彼にも自分にも警戒の念を緩めることができなくなる。活発に敏感に彼女の注意力が駆けつけ、彼のうなじに、髪が寄り集まって一方にくるつと巻いていて、脊椎が左に彎曲する。彼の左手はポケットのなか、きつと誰かにかじられた傷があるに違いないわ。彼の死を予測し、痛めつけるのをよるこんでいるあの女たちのうちの誰か？

——わたしの子供の頃からの理想といたら、とぎすまされたという感じのオールドミスになることだったの、落ち着いていて、冷酷無比で、美人で、とても人を寄せ付けない、高級なことにしか心を動かしたことの無いような、わかるでしょう？ あの感じなのよ。でも努力も空しくて、わたしは理想と違い、この年になつてもオシルコを食べようか、なんて思つたりしているの。四、五歳の子供と同じエレベーターに乗り合わせても、声をかけられたらどうしよう、なんと挨拶したものかと、ものすごく心配になつたりするのよ。ときどきエレベーターのなかで足踏みをして、危ない宙づりでぶらぶらしているという思いでふるえあがってみたりもするの。いつもまわりから冒されて、いつも得たのしれない苦しさにまみれて、わたしは断固として何も言えず何も出来ない。それでも、あなたは、

そんなわたしが好きだと言ってくれたわ。これは奇蹟ね。あなたは何時も、ファンに囲まれていたのに……。

彼女は彼とほかの誰かが彼女の話にも舌を見せていそうで気がかりになる。

舌を見せた反応が言葉できては困るのよ。急に話し出しては疲れるでしょうから、そうやって黙っていかまわさないわ。

彼は疲れて声がでなくなったというより、彼の頭そのものが無口に成り果てたという様子で、背に後頭部を乗せて、上を見ている。彼女の震動を知覚する器官が恐ろしく敏感になっているというのに、体中がしびれるほどの静寂がきている。

この部屋の家具の堅固さ、椅子のひじかけから前に突き出し、空間にとまっている彼の手まで石でみがきあげられ、彼の体と手の位置と彼女の位置関係、その手を振り上げれば……、彼は彼女を殴るためにその手を使うかもしれない。この部屋のなかを歩き回ると、一つくらいは殴るための装置があるように思われるが、装置といってもむずかしいものではなく、人間の手。彼の手には何も握られてはいない。彼の机の上にある本の間にはさまれた封筒は、彼がさっき大切そうにポケットのなかで握っていたものだ。彼はウィスキーの水割りでわけもなくご満悦で眠ってしまい、もう酔漢のうろつく時間になっている。彼女は彼を見るが、その眠りはもろく、ちよっと肩を叩けば彼の臉が動いて瞬きをしそうだから、ビンから発光しているようなかなブルーの微光に、彼が完全に凍てつくまで、彼女は待つしてみる。

れ、自分のサインさえ乱れて書き損じている。彼女は五人もの女の後で書かれていることが不満で、広告の裏の遺書をむさぼるように見つめ、怖気つき、追伸のある遺書に笑い、凍りつき、一足先に死んで行くのは彼女の方だと思う。二つに裂いた封筒をそっと貼りあわせ、こっそりもと通りに本にはさみ、時間をかけて、もうひとつ重みのある戦慄が、犯罪か卑劣な暴力のような激しさで彼女を襲ってくるのをまっけている。

部屋の窓からはじまり、限りなく繰返される幾何学模様、街の果て、ビルの上を飛行機の尾翼だけが滑走していく、尾翼は、真紅、コバルトブルー、紺、黄、ピンクに彩られ、三角や四角やカギ型やスプーン型の、模様が描かれている。地上に十五度ほどの角度で一直線にいき、上昇をやめると、直角に曲がって太陽に向かって磁力にひかれる鉄片のように飛んで行って、どれもいったきり、もう戻ってこない。空には泥棒の足跡のような雲が散り、街路樹は樹冠を海藻のように泳がせていて、よく見れば、海際のビルの上にはジャンボが豪華船と並んで居眠りをしている。

彼に向かつて、とりとめもなく口走っているのはやはり彼女だ。

わたしはこんなふうに……これでこうやって、こんなやりかたで、ふふふふふ……。芝居のように、

自分の感情をこめて、カミソリの刃を引っ繰り返してポケットにおさめ、眼を閉じてまさしく死を想い、死んで見せている。彼女はその刃物を捨ててしまわなければならないと思う。今ではなく、もう少し落ち着いたときに、気づかれないように……、あとで。何故なら、あなたが笑って見ているから。

彼女と彼は向きを変え、見合ってはっとして顔をそむける。彼女は窓から首を出す。

ひとは真上から見ると小さくつぶれた円でしかないのに、どうお、犬は背中が広くて大きくて、地を蔽う面積の大きいこと。

彼は窓から青黒い手を出して風にあてる。

——この風にうまく乗りさえすれば、無限に見える波乗り、両手を体につけて一気に下へ降りれば、古い映画の画面みたいに雨が降りつづいて見える周囲、地の蓋になるのはぼくの影だな、おしまいは結局、自分の眼に蓋をするかたちで叩きつけられる。

なんとなくあたりに幸福めいた光がふえてくるのはなんだ、ふたりは窓のふちでこの世の最期のように体を寄せ合い、鼻を上げて後ろに身を引く。彼女は彼にうなずきながら、いま、あとさきのない言葉はいえない、頬も胸も焼けるほどそれをやめましょうとはいえないのだ。

——あれ、みて、小さな、ひとかたまりの、薄い雲。おそらく誰かが撒いた、葉の粉だと思うのよ。猛毒の。そのひと、ひとりで死ぬんじゃないから、大勢の人や鳥を巻き添えにしようと思論んで、空に放り上げたに違いないわ。それでその成果を見届けないうちは絶対死ぬものかなどといって、なにもしないで粉のゆくえを双眼鏡で見つづけているのよ、きつと。だんだん葉は散って、うすれて、

空気色になって、どうにもならないと分かりきっているのに、その人、何年も、何年も、葉のゆくえを気にして一生死に切れないことになるんだわ。

彼女はずっと自分を見張りつづけ、目を病み始める。死神の冷たい息の届かない盲点があつて、盲点のあたりで厳しさがなくなつて、死の想像が、恐ろしくもないものになつてゐる。死などという冒険なしの死がくる。柔らかいくちづけをし、軽口をたたいて、よく観察しあえば茫漠とした関心しか生死に対して示していないのだ。卑俗な幸運めいた光はひからびた彼のまばゆい中心からきて、彼女はそれを見つづけて目をそらすことができない。彼女の後ろの死神には打ち明けることのできない秘密をもつていて、彼女は前に飛びつき、ゆたかに息をつき、一応ひっそりと息をひきとつて、後ろの死神と前の彼が裏返しになり、彼が死神に、死神が彼に、鏡の自分の映像に飛び込むように心中し果てるまで、しっかりと死ななければ……。死は心をときめかす疾風だが、彼女はゆっくり首をふつてしまふ。墓場荒しの共犯に引き込まれそうなんです。どこか死としての軽微な形式上の誤りのために返送されつづける生命。彼は厳しい措置を受けているのかもしれない、そのくせ、三、二、一、秒読みを繰返す残酷なやりくち。

病院の前で、ふたりはお互いに自分が診察を受けるのではないと言って争っている。

——あのかたのなかでは、誰かが注射針でつかれ、次のドアのなかでは誰かが切り刻まれているのよ。わたしはごめんだわ。

——つぎのドアのなかでは、誰かがX線で骸骨にされてしまっているんだ。何もかも見透かされてしまう。僕も嫌だね。

——そのつぎのドアのなかでは、正気なのに気が狂ったことにされた誰かが、いらだって駆け足をしているのよ。でもね、この病院には蘇生装置があつて、そのドアのなかでは死人がつぎつぎ甦って平静な動悸をうっているでしょう。あなたも、やりようによつては蘇生するわ。

彼は彼女を、彼女は彼をうながし、それぞれが付添いのつもりになつて、病院のなだらかな傾斜のざらざらした廊下を歩いて行く。すれ違う女がじろりと彼を一瞥していき、また戻つてきて、彼女ひとりに、ためわらずに自分についてくるようにという。彼は彼女の背を叩いて励ましていけというから、彼女はげんな顔で女についていく。廊下の曲がり角までくると、その女は声をひそめて立ち話を始める。

——あのかた、もうだめねえ、死を宣告されたんでしょう？ 助ける方法は一つしかございませんよ。あのかたから6CCの血液をとつて、私のところに待っていらつしやい。血液から特効薬をつくつてさしあげますよ。まだ実験段階ですが、すでに百人のひとが救われました。こんな時には藁ですよ、つかむことです。

女は忙しそうに靴音を残して行ってしまい、彼女は車椅子の男に鋭い視線をあびせられ、こんなところで弱気になって、髪にブラシを入れていなかったこと、ブラジャーをつけてこなかったこと、足も素足だったということ、いろんなことが罪で、見ぬかれてしまったのだと思ひ込む。前の場所にいる彼をさがして迷い、目を包帯でしっかり押えた、男女が手探りで歩いて来るのに出会う。彼女は足音を消し不在のふりをして立ち止まるが、目の見えないひとりには彼女に手探りの手を這わせ始める。彼女は飛び退いて逃げ、彼らの後ろに回って、彼ら同志が間違っている手探りを見物しようとするが、何ともない。

彼はだまされはしないだろう。彼に告げずに血をとる方法を考えて、彼女は痰のからんだような声をひそめる。果して彼に血がまだ残っているのかどうかわからないけれど。

彼女の頼みで彼が果物の皮をむき、彼女はナイフの滑りでつく傷と、血の滴りを待っているが、彼の青黒く骨に寄り添った皮膚はまだ疲れを知らず、びったり閉じた命を保ち、力もっていて傷口を決して見せようとはしない。

彼は火のついたタバコを持ち灰皿にタバコを押しつける。今が車中であっても、ホテルであっても、彼女の部屋のなかであっても、場所も時間も選り好みはしない。ただ彼の血の6CCを待って心を砕く。彼女はつらい現実から脱出して彼にキスをし、ついでに噛んで傷つけることができるという夢を、最期の切り札として温存している。

彼女は彼の腕の静脈の一本一本を材料の吟味をする板前のように、どこが適当か巻きついている青

黒い血管地図に顔を近づけて、その一本を選択する。彼はそれとは気づかずに、彼女のうなじに軽く手をふれて椅子にもたれ、ぐったりしている。

廊下をガヤガヤと団体旅行の一団の話し声がすぎ、引き伸ばされるその決行までの時間を、彼女はずっとおじけついでいて、彼が触れているうなじのあたりにある無力感を、頬のあたりから歯茎や唇にまで及ぼして頼りなくなる。

——あなたの血がほしいのよ、欲しいから分けて下さい。

——いつて彼女は右に左に首を傾け、ぶるつとふるえあがる。

——きみ、何時から吸血鬼になったんだい。驚かすなあ、まったく。どうぞ、どこからなりと吸いとって下さい。命はいりませんから。一滴や二滴ならまだある筈だとおもうよ。

彼の手首の関節をぐいぐい動かし、今にも踊りかかろうとカマ首をもたげ……一気に……彼女はその手を自分の鼻の上におき、目を蔽ってすくんでしまう。彼の手がおおっている彼女の目や鼻の下、歯はとんでもなく光って大きい筈だから、血を飲みこむのを待ってもつれては彼女の腹のなかの怪物の群れ。その手から顔をそむけて彼を傷つけるまえに、彼女は彼女自身の恥部をかくすように、その唇をしっかりと綴じ付けてしまい、もう、心臓に送り込む自分の血さえ一滴もなしですむ。

朝がきて夜がきて朝がきて夜がきて、朝がきて何ごとも起らない、彼女はもう心を労さない。彼を襲う死は気まぐれで、死の破片ばかり、いつひとつの彼の死として、組み合わせ完成させるのか分らないから、彼を見守ることよりも仕事を始めることをしなければならぬ。花びらから水玉が裂けて飛んで、紙とペンがお互同志でふざけ合って文字を書いており、彼女もトックリ襟のなかに皮膚の薄い弱いところを隠して、遊ぶように書く。彼女はバーゲンで買った男物のセーターの袖口を二重に折り、そのためにペンを持つ手は何時もと違って紙につかずに浮いている、筆の上の方を持つて腕で字を書く書家の気分だ。支えのないペン先は形の定まらない判字をつくり、お前のせいだ、お前のせいだ、と書き始めてしまう。

あつさり夜がきて、彼女は助命の願いを込めて書いた紙の裏にもう一度書く。なにごともない、なにごともない、文字の濃いところが引つ込んで、白い紙がリズムカルに浮き出してくる。あれを書いたことは間違いだった、間違いは水に流して。

遠く、地平線が丸く見え、地球上は早苗ばかりが風にそよいでいるのかと思われるほど広い平野の真中、緑と空色を塗りつけるしか方法のない写生に毎日毎日出かけていった幼い頃、赤や黄やピンクをつけ加えては失敗して破った画用紙を細い水路にのどかに流した。あれと同じにあなたは引き千切られ、流れていくことになるに違いない。あのころのわたしは松葉みたいに細かったけれど、大きな目玉だけで大人をたじろがせたものだった。いまはあんなに澄みきった目など肌色で肉に埋もれてし

まっただけで、本質的には大して変わってはいないわ。あのころと同じことがしたい。画用紙の千切り方、川への流し方、流れる水路に沿って走る走り方、走りすぎて流れてくるのを待つ待ち方。低空を追走するカラスとんぼ、コンペイトウみたいな花を揺するそよ風。その全部がわたしの絵だったけれど、あなたがあれほどみごとな絵になるかどうか……。

彼女は彼の遺書のありか、遠くを指す三角形の鋭角をとがらしながらひとりごとをいう。

——破って捨てることもできない、そうっと、そのままにしておくの、どんな刺激も与えないように……。普通遺書を書いた場合、どのくらいの期間を置いて死ぬものかしら、ともすると、わたしの病気をよくする催眠効果を狙って彼は書いたのかもしれない。だって、ちよっとふざけ過ぎていないかしら？ 彼女は言いながら、紙をペンで切り刻んで、これが、死神の部屋のドアのカギ穴。ただし、もう開いています。

性急に迫いかけなければならぬものや、引き止めなければならぬものがある。誰にも野心はあらずだから、空虚で恐ろしい暗闇の樂園でなければならぬあの空に、一カ所にとどまって輝き、着陸の番を待つ大中小、三機の飛行機のライト、上下のライトを交互に点滅させながら行く飛行機が、暗黒のなかに本当の存在を現わすのはぼうっと白くたちのぼる大きな尾翼だけだ。ひび割れたエンジンからの黒い竜巻は赤い火星をかすめて追い払われ、倦むことのない悪夢に似た大きな炸裂をおこす。それはX軸とY軸の交わる原点にいる彼女に対して、なにか意味を与える方程式をつくっているに違いない。

窓から網を投げ、埃を、竜巻を、尾翼を、ライトを捕獲する。窓は閉ざされたまま、何もかも悩ましい程自分のものではなく、彼女は抛りどころのない貧しさにいる。窓はスイッチをきりかえられたように色が変わり、凄まじい光を発して、断ち切れる線、歪みに呑みこまれる線、畏に陥ちた獣のように狂った輝線が乱舞したあと、いちめんにくたくたの迷路を映し出す。

電話のベルが鳴り始める。彼女は受話器を耳にあてて、牢獄につながれている長い線をたぐったり、手に巻きつけたりする。

——娘の場合、大切に紙で包んだ葉を持っていましたの。そつと気づかれないように取り上げよう、取り上げよう、そう思っただけなんですけど、いますぐ飲む気などないのだから、あとで、気を損じてはいけないと思っただけだから……冗談にしろ。……とりかえしのつかない言葉は言えないでしょう？ 他人が何を忠告しても、なにごとくもなくなって、娘の暗い気持ちを引き出すのが嫌でしたから。触れられたら嫌になって、触れられなくなると……。そして娘は死んでしまいました。愛するものを死なないように引き止めるのが、短い人生の最大の勤めなんでしょう、それが出来ないなんて、人として無意味なことなんですわ……。

彼女に伝わってくる言葉がかすれて聞きとれなくなり、彼女は電話線のつながりをたどっていく。

——もしもし、わたしは、どうすればいいのですか？ 手術？ 注射？ 放射線？ レザー光線？ 抗生物質？ 冬眠療法？ 麻薬？ 催眠療法？ 転地？ どんな木の実に？ 電気ショック？ 教えて下さい、おっしゃる通りに致しますから、どうぞ、彼を助けて下さい。

向こうの女の声が急に聞こえて大きくなる。

——いま、彼のために祈ったのです。あなたは気づかなかったでしょうけど。

女は電話線を言葉で太々とさせてしまう。

——それで、いま、あなたは何とおっしゃいましたの？ 電気ショック？ 聞き間違いでなければ、あなた馬鹿ねえ、いい加減にして下さいね。電気ショックにかかった時、股関節が一直線に真横に開いてしまうってこと、ご存じないのね。

電話の向こうは人が入れ代わっている。

——彼が死にそうですって？ あたしは踏み潰されている思いなんです。あたしがとやかく言ったら、予測どおり、彼の死が爆発してしまいますもの。あたしはずっと昔の彼しかしていかない、彼の愛についてとやかくいう資格さえもっておりませんが、あなたはあまりにひどいんじゃないかと。彼にあなたは死ぬための赤い柄のナイフをプレゼントなされたのでしよう。死に目に逢うのが好きだなんて言って。まるで、サテウルヌスのように、口を開けて、獲物を待つて！

彼女は真夜なか、黒い重油のような、どろりとした夜をみている。黒の空間にたえまなく濃い褐色の玉がぶくぶく生産されていて、なめらかで、むらなく、てかてかしているつやが、よく見れば青や黄色になる。こんなに死とすれすれにいといるの、毎日毎日、結果として何ごともなく過ぎてしまふ。生きている続きのように死んで、死んでも動悸や不吉な落書や遊びの夢にうなされているといふことかもしれない。

夜をよく嗅げば、その色にふさわしいドロ池の臭気がふきでてくるが、しばらくして夜の表面が落着き、また、突然乱れて、噴出した鉛色の玉がネックレスになって空にのぼっていき、わずかな音も、野生に戻ったような彼女の耳にびんびん響いてくる。

——ほんとうの意味で覚めて生きていることなどめったにないのよ。わたしだけでなく誰もかもこんなに短い命だというのに、わたしに何ができるといえるのでしょうか。彼女は後ろを振り向こうとして、振り向かずにいる、責任回避ではなく、やっぱり彼女自身が後ろなのだ。時間は折れ曲がり彼女自身が後ろと密着して、神と共に居を占めている不在、

——そうなんです、わたしは死神なんです、だからこそ、ほら。彼女は瞬きひとつで神のサインをする。

——誰が彼女に寛大な措置をねがっているというのです？ 耳のなかで、ラウドスピーカーが、百も一緒に叫んでは聞こえない。

——とうとう成し遂げましたよ。

緋色の絨毯が目を押し、コーヒーの匂いが鼻をつく店のなかで、彼はふくらんだカバンのなかから

角のめくられてくしゃくしゃになっているコピーの紙をとり出そうとしている。

——成し遂げたなんて、びっくりさせる言い方ね。なにを成し遂げたものか、そんなに痩せ細っているらしては聞き返す勇氣ありませんわ。成し遂げたなんて、死を前にしている言葉ですもの。

少し崩れた無造作な髪の水が彼と向き合って話しており、店のなか二三メートルはなれた隅で、彼女は耳をすまし続ける。

——近頃は死んでも、死ぬ筈がないという確信ができました。ほら、これですよ。(A構造と無限小自己同型について)書き終わってほっとしました。

——それで、発表なさいますの？

——発表しないのは、自分の病気の体を自分で観察しているようで、けがわらしいことですから、発表しようと思いません。

——袋だたきに合うのならまだいいけれど、素浪人になってしまったあなたでは、学問的立場以前のところで笑い飛ばされるのでは？

——題名は平凡に控えめにしていますが、権威の説をなで斬りにして、ボーンと投げ飛ばす、それは罪深い、みごとに罪深い研究成果です。

——鼻毛の数でも数えているということになりますわ。学会なんて尾ひればかりがびんとはっている人たち以外は存在を許されないとことなんです。聴覚障害者に向かって叫ぶのとはわけが違いますよ。

——僕は病気だからといって、幽閉されていなければならぬ理由はないと思う。自信のあるやつは

哀れな病人のいうことに耳をすまして見せるものですよ。

——いまさら耳をすましてもらっても何の役にもたたないでしょう？

——ぼくは個人的な病気なんかにうじうじしていたわけじゃありませんよ。ぼくがこれをやり遂げるまで、自分を引きずってくるのにどれほどの抗力と戦ったか。

——恥はかき捨てではすみませんわ。

——すまないなら永遠に恥として残るわけですね。ほっとしました、残るものがあるのはいい。

彼とその女の話している声は何千年も前の壺のなかに詰め込まれていた言葉のように、不思議にコダマを引き連れて、つぎつぎに響き出ており、

——何にしますか？ 何を召し上がりますか？ 彼女はウエトレスに聞かれて、もう三度も口ごもっている。

死の前、苦しんでいる彼のそばで、彼女はうつむいて、手首の脈をつかんでいる。彼女の手がふるえるせいか、三つ打っては一つ休むうちかたをする。落着いて、正しくつかんで、脈でなく彼がわずかにひくひく動いているのかもしれないから脈を探しなおすが、手は透明になってしまい血の色は何

処にもない。脈は止まって、つかんでも振っても、押さえつけても、何の反応もない。

彼女はおそろしい静けさのなか、死と戦うための準備をはじめ、ちょうど自分自身の泣き声に震え上がる動物のように、書きつづける神様の増加に恐怖しながら、書きつづけて休む瞬間を許せなくなり、すさまじく凍りつきながら、彼女は偏や点の欠けた文字を書きつづけている。

医師が怒声をあげる。

——一体、何がどうだっというんだ！ え？ さつきは風呂に入っている最中だったし、今は一杯呑んで眠ったところだ。さつきは午前一時、今は午前三時だ、なんで何回も呼び起こすんだ、なんの権利があつて。さつき言ったように、大したことはない、はじめとおんなじじゃないか、どこが悪化したというんだ。こんなにいい脈をしている。え？

——なにがどうなのか、はっきり言ってもらおう。病院から来る道は浸水騒ぎで、まだ乾いていないんだ、この家の前で足がびしょびしょになった、え？ 何故だ！

彼女は死以上の恐怖で怒声を聞きながら、小さくなって聞こえないふりをし、決して医師の方を見ないでいて、突然甲高い声をあげる。

——あれを見て、死んで空を見えています。手のほどこしようがないのですか？

——え？ 何度言ったらわかるんだ！ 始めと同じじゃないか、悪化なんてしていない！ 何故、そんなことを言う、生きていないじゃないか、病人とふたりでぼくを馬鹿にしている。

酔っている医師は怒鳴る、百万回も。

彼は三分後にもう一度息を引きとる。

彼の心臓に彼女の手が突っ込んでいき、いろんなつかみかたを繰り返し、強い脈動を呼び起こそうとする。彼女の胸にも彼の手が突っ込まれていて、心臓が力いっぱい規則的につかまれては放される。繰返され、甦らせようとされているが、死は愛撫なのかもしれない。きびしく振舞う愛を新たに創り出す力動的なもの、引き筆る豪快さ、毎瞬の不連続の死の部品がどんな順序を経て、どう組み立てられるか。

花のある部屋で、ペンを持つという陰険な作業のために溶けて顔のない彼女は、ささってくるホチキスのとげに向かって、自分のものでない太々とした咳をする。ひとはみんな妖怪をもっていて、それに支配されているのだから、形のある物からの痛みは、かえって彼女にとってさばさばして気持ちのいいもの。痛みは鋭さを失って、ときにあいまいな痒みに変化する。彼女の手は、ペン軸の反射の輝線を一本もって、影をつくり、影のなかだけで小刻みにペン先を動かしていく。

——わたしは、死の一瞬前ひとがどんなに魅力的な化け方をするものか、興味深く見守っていました。殺した人にとっても殺されたひとにとっても、人殺しのしみは夢のあと。誰の損得計算にも入らないといいました。

——幸福などというものは、薄汚れていてきたなく、気に入らない。そんな吐気のするものの召使にはならない。わたしは死に目に逢うのが好きなのよ。といいました。

——彼の心を傷つけないという歯の浮くような言葉で、暗に彼と彼の命を見殺しにして楽しみま

した。彼は何人もいるといたしました。

——わたしは、こんなにも彼のために書いた、見て下さい。百万もの神に助命を頼み、神様が力を合わせて必ず救ってくれるとも、死神をこんなに呼び集めたのだともいいました。

——書いて死神を暗殺するもくろみが達成したのだともいいました。陽気にいたずらつ氣たつぷりに、遊びをしているのだともいいました。わたしは書くことが犯罪だと知っていました。

——わたしは心中めいた印象の死にかたは選びたくない、ともいいました。緩慢な日一日とやってくる死は我慢できないともいいました。体のどの部分もが死に魅入られているという事実は怖くもなんともなく、新陳代謝していくのと同じに気持ちのいいことだわ。などともいいました。

——こんなふうには、こんなやり方で……ふふふふ……と笑って、死を話しました。

——運命が一夜でかわったのねえ、どっちが死ぬにしても、先に死ぬ方が勝ちよ。と決定打を打つようにぬけぬけといたしました。後に残るのは自分だと知っていて、いつのりました。

——さよなら、お先に、と。陽気にいって、彼を労わるのを放棄し、彼に労わられたいと欲しました。

——あの女たちが勝ち誇って、わたしに話しかけるのを楽しみにして、待ちくたびれてもいきました。わたしの涙はあの女たちからの盗品ですむのだともいいました。

——彼を看取るという最期の時間を、こんな風に何故か、自分の病気を製造することに費やしました。

彼女は精根使い果たすほど熱心に自分の罪状を思い出し、あばき、罪とのつき合いに、なんとか、句読点をうとうとする。それでも、まだ、不足か誤記があるのか、何度でも罪状は、つつけんどんに

突き返されてくる。罪の言葉はどんなにも沢山つくり出せそうなものだが、けちくさいものばかりで、罪状の書かれているこの紙に彼女自身が張りつけになるよりほか、罪をすっかり陳列する方法はなくなっている。

彼女に向かって黒い長い足の蜘蛛が、彼女を掴み取ろうと大仰な歩き方で近づき、じっと見つめ、やがて彼女の体を乗り越えて糸を張り始め、見えない糸で彼女を張りつけにしてしまう。

一時間で五十年たったかのように彼女のまわりには、静寂が腰を落ち着け、おせっかいな女たちが、見世物小屋のお化けのように生れては消える。彼女は歩くのもよろめくのも痛むのもひとのせいにかけていたのに、もう彼女の罪を引受けてくれそうなどとは、誰ひとり現れない。

紙がガサガサ鳴り続けるなんと野蠻な音。彼女は落書をして、またも神様と書き連ねた紙を一枚ずつ数え始める。ホチキスでとめられた紙の間をぬけて、朝の冷気が吹いていく。

彼女は洗顔をする。引き千切られた神様のふた文字が水にとられ排水口から消え、もうふた文字が水にインクを剥ぎ取られ、彼女の毎朝洗い流す眠気のような青い靄に囲まれ、崩れた文字に早変わりして、排水口の渦をひとまわりする。

もうどこかの水のなかで、紙の繊維がとけて、クラゲになってただよい、白いにこりだけになってしまう。目の悪い地下の魚がふかふか口を開けるが、死神は消え果てるのではなく、流れて空にのぼり、降り、水道の水になって、いまはもう彼女の顔に付着し、飲まれ、タオルと一緒に絞られている。

そのコーヒー沸かしのなかで沸騰する。彼女のふるえながら、泣きじやくる涙のなかに、泣き声の水蒸気のなかにいる死神がふうふうと飛び出して、彼女の目の前で死神がむきあっている。

気を取り直し、冷然とそれを眺める。手放してもなお、死神は彼女の魂のなかに閉じ込められているのだ。

彼女はゆっくりとひと息、もうひと息、不吉な水蒸気を吹き出してみる。そのなかに、見方ひとつで彼女を無限に楽しませてくれるかもしれない死神たちの動きがみえる。

もう書くことはいらないのだ。

完